愛流の家つと

二

3583

藤本文庫

新古今集義後の中秋中二の部

秋歌上

家隆卿

おそ山ぶかき月のかげ

きのふぶかしうんとうとうしほのけむりの月の杜ふ秋八幡さとうか

中秋「月すまばこよひましらのまさこく」　はるふきのみぶに

ここそんとうあはひしみこころはなし

最後の月大き僧の像をふうる秋ゆきこそ石

秀能

吹風のうたはねてねる秋のちをへれ杉ふ秋さまもけり

上二句「秋ふうぬとうんとうあはさはるふこんとうすぐものこと山そこ秋さ

○次に法入れ初と二の部

藤本文庫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又とりつるよりもやはり秋の雪をこめたり。　あづまの
こゝろをもてあそびまつり。　此歌をよみえんまつぐる説なり。

白氏

老てまつ秋の松のうへふるゆきぬれてもとけぬる秋のさゝ波
なんぞたゝしい白詩いとめでたし。　波ふめきさゝる松のあ
ちらふ秋の物思ひ此歌まつをたづぬるこゝろにもあてはまるこゝろ。
雪ハ秋のよりづ取ものゆゑ。　ゆきぬるみりやを
ハなぐ此歌まつをこゝ取り。はぎをきるかぶをやいと民
しくぶとしりまつをたゞしるやいつまぶをこゝろ
うつしかゝるぶやを。　此歌ふるまつ物ふいろく説あれ

ども。みなひがごとなり。

承昭

なぐきの雪のくぶをまつをこゝろうつしかゝるみし秋の物思ひ
なんぞたゝしい詩もまぐてしめぐくし。　古。夏ふ十ふ月ぐ
きの雪のこゝろをまつをなんぞふ。　四の白ハ詩を秋を中おく
ぶをふまつをまくこゝろ風をこゝろうつしかゝる秋ハまつり。
ゑくこゝハ音の孫の詩取れる。

越前

秋をたゞんりおくゆ雪を秋の月のうをもあひけるみ
四の白ふ秋をこゝる中に三の白ハ白ゝりおく雪ハ波をみることを

を志し、三の白を露とよめる事、いにしへの白は神の御心なれば、露を
弘法大師、あまつ空なる月の白玉とよめり。あまつ空なる月の白玉
一そのゝ名ゝ秋のゆゑ、露のしゝげき、ハきぐ相あるべし。
あく、神の源なる事、よそのまゝ、ゆゑ、ひらくことゝよろこぶ。

後撰 紀貫之

ぬさとのゝ小あれ、しらつゆ。

五十首詠 秋の部 後撰

きのふ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初二句八雲のうまをまもりたまふ　嘉永五年

又ふかき孫あり。　後撰に天川うとくる舟のうらぶれをかこつ

なるべし　秋上　　　

ふるき歌の後、うかひごとまれり。

鉄　しらず　　慈円大僧正

なかめやる月ひとり萩の上葉にぞ秋のそらの
袖ぬれぬべし。　まづ秋の名ある小萩の花の色を、
き初めはじめ、くるを、此等にて、ハ、この萩の花ふ
で、それ名ふ、ひ、萩の、ひ、秋の、ひ、ぬ、く、
ふ、ひ、ふ、し、き、と、。　さて、ひ、ら、ひ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
こ、ま、ま、ふ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

玉葉　二首　秋

拾遺

萩の葉ふる雨、あらしの、秋ふるを、ものもりるよりもつきの影
間もなくぬれぬ。　秋月をとゝ、秋の夢をとゝ、ものしをき
花をそらにもあり。　一首の主、嵐ふる萩の葉ふる雨、
うゝ、しき花を、又、その、あしれつて、小庵の、ものを、
ふ、ひ、ふ、ら、し、庵の、ものを、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ふ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

市立米子図書館

三八つ橋ふきだかめしきうすゝおしこめておもふ
みくまりしふ秋の夕ぐるるおもかげ秋の空ひのゝごと
ふかるめしさのまるるそ思ひ

だつれしらべ

くるるつくるむすめしきその秋なきてあぢ成なる神の霧式
三の白れつゞ成やすうゝゞ空の白ひゝゞゆゝゞすゞでよくら
あくぬくくあり

あのふるその年合ふ

おおしもそでかるる雲やゝ神ふおくゝゞめてくりる秋の夕ぐる
出白おもつぬくの神ふ雨ゝふ霧のおく雨八ゝてゝ

まゝづしくるおもおもしゝ白じゝゝ空の白ハ雨ゝひりゝなゝい
ふゝゝ見ゝすゞゝ白じゝゝゝ二ゝふゝゝゝゝゝふゝゝぬは一ゝハ雨
ゝのくゝおゝゝゝゝゝ秋ゝゝゝゝゝふゝむゝゝし一ゝのふ
らひゝ出秋ゝゝし白ゝあくゝゞし

ゝのゝゞふ作りゝ年ふ合ゝ作りしふ四絵

蕉糸大僧正

秋ひりゝゝゝゝ

みゝ四絵やいつゝり秋つゝ見ゝくゝゞゝゝゝゝゝ秋ゝゝ
いつゝりの下ふかくゝゝゝゝゝ加へくゝゝ作ゞし

鉄の鴻宇

形ゝ年のゝゝゝゝゝゝゞゝゝゞゝ鉄のおゝれゝぬゝゝ

宇華

さびしさはその色となしに秋の夕暮

西行

なんごとなしし。

こころなきみにもあはれは知られけり鴫たつ沢の秋の夕暮

なんごとなしし。

ありけるすんけるまそ言ふ

定家卿

さびしさは秋の夕暮

二三の白ぬきの初ふれたるごとくにけりとしてれる

るゆうぐれ

そもゝ惜てゝ[illegible]白ゝべきとゝるゆ。

秋の雨として　　宮内ゝ

思ふことさしてそれとはなけれども秋のゆふべをなんまそこふ

七十の白のつゝくかなしきは[illegible]ぞこゝろ[illegible]

を加へくゝやのべし。紅たゝぐ。そのこゝぬをんぞゆふじを一ッ加ふ

をゝ[illegible]ゝのゝ[illegible]ゝ[illegible]

秋風のいろもいてゝこゝぬ神[illegible]　　鴨長明

下白紅葉でたゝし。　　古歌ふまのゝ[illegible]

墨ぬゝ[illegible]じゝ。　　いとりいてゝこゝぬとゝ紅神ふハ[illegible]

ゝゝ[illegible]。下白紅葉ゝ[illegible]

秋風ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ぬ秋風ゝ[illegible]

紅葉でたゝし。　　[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

風の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]白紅葉を[illegible]

[illegible]　　通具ゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

紅葉でたゝし。紅[illegible]　　源実朝

○実朝の歌は二の巻

又人をゝどかせて又人をしかのまゝにまるゝ秋の風のさびし
さもまた又そのまゝ鹿のまゝ鹿るゝとんさびしさもこゝろ
ゆゝ月の雲のまゝにまるゝとゝみをゆゝかるゝ月新のさび
しさとゝふあゝ三の白小へつゝまゝんばべし

年そ歌きりし何社る月　後鳥羽女

大あゝきの葉の葉のまるをゝりかゝゝて人たのゝまる秋の葉の月
大あゝきゝとゝのゝまるのなゝきゝとゝふゝりてゝまり.

中宮定家朝臣

ゝる秋の月まつ宵の神のゝ人ゝふゝ人ゝるのゝ鹿るゝひのいるゝづ海

拾遺百ゝ三首合ふ　ゝ家朝臣

秋風ゝ涉ゝ者ゝ者ゝ者

いつはてしらぬ海くもゝぐ　月さへ入てし秋半ばかたぶきぬ
えぞ　たゝし　　　

こよひたきもすでふく風をまちしかとよしたきの月をうらん

名にしたがはしこの二三の白雲ふるうろこ　月をこそあはれとみる

まくふかひやきうの月　四の白雲ふべきをうらきこと

るおもしろしこの月をうらんかくまそうの月のつらやみ

秋の月の月合ふ湖面月　宗隆卿

ふかの海やの月のうつろへば波のうへもあきさへけ

ぬ　秋のうつるうつろの波のむすび秋ふか

つきけれ

ふけやうそ三の月しは秋のそら　基家大僧正

ふけやうそきづりもあらじ陸奥の海のうらみまそそ秋のうらの月

だんーーー

[illegible]

殿を拝もひやうも。　ひ[illegible]

つきてかの月を殿の時方はびしさを。[illegible]

[illegible]年前[illegible]月を[illegible]　拾改

[illegible]のもやしあしの小萩咲しよりもみく庭の月ぞうつろふ

もやもあらぬ小萩[illegible]人々小雨をおもこそある[illegible]露[illegible]ん

[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]月ぞうつろふ[illegible]

[illegible]。　[illegible]

[illegible]殿の[illegible]

[illegible]

[illegible]

深うしぬる山のいをの麓にてぶふさぞふまるる月はさびしき

だふぞうしのをまりり。　さそふ山のくれぬくぞとしるべ。

一そそ。外山の庵の梅ぐぬ。ふまるる月をさそ。さびしき

みつをそ。海の月入をそ。さびしさをおしそうめくる秋

さもど深山月をよ。孤ふのくるみちくふ。ぐさぞをおし

そうたる。ねそ。ぞ。ぞ海山のるるとるまぐ。孤ぐ。さそ。ハ

青よりのつぐきふ。かぐ。

月前松風

寿蓮

月をぞ。もるめまるる。ぬまるの。松をつそ。秋風ぞ吹

ぬぐ。ぞ。ぞ。月ぬ。孤ハそそぬ。松のまるる。ぞ。ぞ。ぞ。

くぞ。ぞ。秋風ハ吹渡るぞ。　松をつそ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

長明

あぐ。山ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

ぬぐ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

秋ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

中ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

又ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

松風ぞ。影ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

山月

秀能

あしひきの山ぞの雲ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

拾藻のなん。　袖ぐしめ雨降さとしぐるふりて袖こそ
ぬるゝ事なれ　八せもり。

八月十五夜和歌の浦に月を海辺秋月

宮内卿

ゆゑある事しるものあ海の松ぞ月やどさとぬ秋ぬとのつゝ
ぬぐたしと下白波ぞとくしし。　月ぞれとそぬ秋
たる袖ふあゝぶれども月のやどりたきぞ。おのづゝん
あるさまふ人事とやり。

三夕ぐしよ新古の秋はその歌と浦みすむ月ぞさへる

宜秋門院丹後

ぬぐたし。　三の白浪の月とつゝまるゝ月ぞ
白ふあゝ風ふ袖すゝへゝぬとのひゝ下ある月をこゝ
ひぐぬるゝ。　上下の白ぬる今より後とゝを加へて定べし。

長明

松風ぬ吉ほゝむあゝの秋の神月をあ思ゝ
ぬぐゝし。　月の神ふやどゝるおゝ人のゝひのゝ
思べぞ事のゝ事ぐ松ぞむあ海の神ふもやれりとゝり。
神とのゝいひゝぬゝとゝをいぐ月とのゝいひゝやゝれ
ゝゝすゝをもいぐ月とのゝいひゝやゝれ
ゝゝゝあり。

和哥和歌会ふ海を月　　大隆教卿

秋のよの月やをしてもれあまのとまろ時ぞなき海の波を舟

時方ちうを稲ふ沖ふつり舟のうへるハをしまのなかれ

月を来ーむとてこぎ出てるあまとも　　二三の白いひのき

乃をとりたるそ水ーしらぬさし

だんしーしらぬ

ちゝ山よりふあしのまづふ来バ波ふうちきみねの月氣

色づくーし　三の白まづ山とん来ふ色ハ初ゞ

ちぶ　山ふ色ハつくしかーぶるもきぶ

秋ゝ波ふ来の月八ゝうの月ふ来ふ山ふ色ふ月の方ふ

来ぶ月ふ来ふ色ふ月ふ来ふ色ふ月ふ来ふ色ふ

はるかなる月をながめて。　十四日陽近くかゝ
ぶきて。惜きあるひはせじとこゝろやるかもとやられる月
ゆゑ。貴のうるふとうとねがひしかども今かく山陽ち
くまりて。惜きあるひをばせるこゝろもしふかたり。
ふるるまでもみむもきびたそかなるしれはひもきじ秋のまの月
ひとりとをばじゑもわびうせく。やはべし。ひいれ
て。ふるるまでもみむもきびたそうもしられとりかゝる。

五十そ三のもりしは　　持改

三日の白月でたし。　さゝるべきゆゑをばのこさびしてさや

けさとそふる風をのこしあるそこんとも。

月の月五十そ三

月ごろもめぐりもあひてきく秋の夜月人もしらぬ松のうへ

月ごろもかぎりあひてきとゝ秋の夜八月まとうるみまりて

しきをもおしてふぐさあひてきそれぞあるこゝ人ふ。

特又のゝもり月そうもめぐるあがしとうふあゝび。

完文部卿

さむしろやまちとの秋月風をかしく宇治の橋姫

二三の白朝名でゝし。　かゝもしむしろふかれゝこゝ

ゝ。　こゝのゝもゝひやりこゝるゝ風ふきびらむもあがしいふ

紅葉をそこはかとなくうつしたる秋の夜の月の光にあへるいとをかしき。

又さもしらぬやうにて出てきぬ。いまのうつしやうは雁渡るやうにみゆ。

いとをかしうそりたるまゆびの。或人の云まゆ。

ろかなる雲の月をかくしきて文行新やうの糟糠おどろあらはし

雲をもてはるかる小舟徑月　接改

山の端ひくくひろがりたる。月のいとをかしうみゆ。

さて京のやうにて月をみるに。山ふかきをみるこころもまれ

たまゆ。雲の月をかくしきて。いとをかしうみゆ。

面後月　宮内卿

月をまねかんとてまつ。月のいでたるまのさまの人

二の白きもやすんのさまもあるし。　さて村雨のはれぬるとき

ふかくふるにはたゆ月をうつしたる人をみるとれり。

通具卿

秋の風はやどりる月をもゆすぐ。神なり吹こす萩のうへの風

ゆんでうつし。　三位の白月をうつしたる。萩ふる風のうへ

いとあはれをそへ。たちまち神ふるうごのこずゑ。

ふる風じく月のやどりるを。萩のうへより吹こし

たるやうにいひなせるをもかの。実ふる萩の露を神ふるにし

しるふるあるべし。

秋の月志の小夜ふる新こきてしなぎ〻小夜ふ霧ふきふくり
志の小夜ぎくるてしぎけ志のをうねる　新こきて
秋ふきふくりとかきそめてそうでくし。

秋ふ不奇合小田ふ長月　慈円大僧正

月のくるふしさんの小田ふ長なめて稲ぬの長よ月ふ入るふ
二の白雲の白ふもじ手ふりていつで。　小田ふ長さめてもいつで。

稲ふふふ風ふやうせて〻すむ長八月で海とれもりあうしれる
稲ふ八風の張るまく吹長ふ長れふ手ふせれるまく。

俊成つ女

守る人八手ねぶりまぶりておそりぐらもあ手ば守る
ちらふれれまふるふ手ふれそうとふくもりの
手ふ八月ふそあ孔とるも月のすきるふやるる
ふとれるもていふ手ふ考ふ。　されふ八風ふまきて八風の吹
あふ長ふ海せあふてづふろひもきぬふ手ふ手ふ八月長八
月新つぎふとれもりいるまふて手ふふと八河の長
ふ月のもるふてふふ手ふ月ふ手ふ八河の長
ふとふふふきふん。ふ長ひふふふ手ふ八稲ふふふふふ
ふふふふ手ふ。

歌――ふ人

あらぐれて袖ぬらすつゆもるまぢ月ふるさとの庵のさむしぐれ

光ぐ　たゞし　月ふかみ月なかばより

百首うたよみし秋のうち　式子内親王

秋のこゝろ八十ぢゆきかふうつりゆきどころ秋ぞ多くの月の影

光ぐ　たゞし　下白　紅葉　上白　紅葉ふるる秋のふる

みるゆめ　月ふかみ　下白　波寄ふ月のさやかるる光おもかげ

月秋ふかみ　さてもの秋の花も月も秋のあ

ぢ　たゞし　秋のこゝろ　紅葉ふるとくもりぬれば花ふかるこゝ

ろ　紅葉　たゞし　上白　紅葉ふるるとおもふこゝろ　上白

紅葉ふかみぢの月ふかるあはれ　花ふかる

なるこゝろあるこゝろ　ふるみし　きひごろ　ふかる

いのぢ　月ふかる　ぢ

秋の淵の中ふ　土上天皇御製

秋の露やたまふいろ　ぢ　ぢ　月の影

ぢ　月ふかる　ぢ

みるこゝろ　月合ふ　通　ちえつ

さゝ　ふる　月ふかる　秋のよの色

今夜　月ふかる　ぢ　ぢ　月ふかる

月のあるこゝろ　月ふかる　月ふかる

月　ぢ　月ふかる　月のあるこゝ

孤房つれの三合ふ號月　二條殿贈歌

大うらの秋の孤ぶ山なかなる月
みんでたくし水白組くらし。　大うらの八ぶくの世の人
みとらしまさこ。　露きくハ〻多めく神の雲くこ。　又と
いるまてに孤ふ月のやどれることを思せるとすべくかく
さ白ふこをいひくかしこを思せこしてよひてこを
しいすくこ。弄のてくこ。

又千そこ三のなりし時　孤弧

さくひくひさそし八ぶのれ志ぶうめやどる月の神の雲ふ
みんでたくし組みんでくこめし。　三の白れてふを八ぶ白ふそし

八ん月おくくやくふきとも倒多しこ三きふ月の孤ふ白
ぶくこ。八三のふ露の志ぶくきしバとてこ三ふこ。　白
乃白月の雲ふとふ世ふ上ふ世ふふてこてふれく
勢ひふこそ多でたくし。　孤白ぶくこ孤ふ月ふ白ふこふ三ふ
こふくこしまくし。　一そのこ三ぶくこひふねくいふふ露の志
ぶくこ三ふくこもふこふこふこふこふこふこふこふこふこふ
月三秋の八孤の加くせぶくこふ三れり。

秋二奇下

和歌所にて人々のこゝろ〻をのこしおく題

[illegible]

[illegible]れぬまでやひとり秋の夕ぐれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まさきかづらはいひてはいはんとあし。　まさきをとはんとて
みそりて。はるもみさきらつそくのこのもしむたかれも。
とひはしたかるるもしかの戸見るこの海のうらあるべし。

歌しらず

春うつる春はかすみのうつりやすらん　みのうきをいく春あしの
春のかすみのたちもとりあつまるべし。　春をの
こりはかりをそぬるらんか。

みるかの春の合わ　乙雄つ

春うつる山の春のたちもとりぬる春ふかるかの松
たちぬるの春はかすみのたちはじめの春ハまかすみあそ又むすかふハ。

春のたちもとりはかすみの春ハ春ふかるかの松
たちぬるの春はかすみのたちはじめの春ハまかすみあそ又むすかふハ。
春のたちもとりはかすみの春ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三の白のをゝなる面をのこす。思の白さまも八倍ふ
こゝおやゝかゝいどうもろくとうもこん。一ぞのこゝはのさ
やうなるまゝかゝ秋のゑもしさのあんべつきそ思へこと
ゝ。せめて秋ぞらゝとをかすもまつのこゝせどやゑ
ふ厚どかをしそ月氣もあるあをさそしいどうもろく。夜う
ぬきの笠ゝく秋ゝらゝとのうまゝこゝさもきぬとゝまゝこゝ
ゝ。ちさ沼上白のさゝさ夜いどうくあやまれり。

接衣

みよしゝ野の山の秋風さを衣うつ夜ゝ川ゝ音
いとゝ夜ぞふけ。上白詞めぐたし。ちさをすぐこゝ世今

乃山の白雲つもるこゝしよりかをゝ秋ゝ

武蔵国秋之

ちゝびうつきあゝの雲ふゝ雲あゝ相思ふ雁の雲ぞこゝぐる
うつゝゝのゝゝぐるゝ。ちゝびうつゝふの千声万
声無止時ゝ。ゝゝふゝりあゝふゝ。

下総国秋なりし

ふゝあふゝゝ山のゝちゝ月さゝて雲ゝの雲ふ夜ゝつ夢

宮内卿秋

ひゝゝしめる山をゝ尾のゝぐゝり雲ふ雲あゝゝゝ月の月氣
下白初よゝし。ひゝ。三の白八ゝゝ雲ふ雲ゝゝゝ

つゆよりそくるかはらのかぜとともにひろくなびく
ゆきせくるかわらもしらぬ巧なるいとくてとりやすがてしたぐり尾ふ
ふいひろくふかきの尾ふ家のあまてるをよそくるふちりく
家も山もるの家とそくかのもと又家をよそひく家家
をするけるそ家のあるりふふかるのひとをとなるこそ重
たるがそ尾ふ家のあるやうふかくふよくれりく家
おまをよりてふ家ふ月家のうつれるが家のおもてるや
うふくすがひくさたくまらふ

拾遺大納ふ作ものとも月ふ家そよまをなるふ

家菊

人月ふ山ゆくの者ーきふらく拾ふ者ふくすがふ月ふ
花のさかりふ八人ゆくをそふし秋べのみふらく拾ふたがふ
ふるれまるふる家のよりがふ月のこそ今ふれるとも

五十そ家ふすりし付

むらふ毎の家もすがひぬ拾の家ふ者ふもものぼる秋の名る
ゆくたし　むらふ毎八時ふるがそのふあしふがひぬる
ふ又者れもの家りてをくしかくぬふ中のさ毎く

秋の沙弥とそし　右上天八宮と沙弥

さくしふふふ山の秋のかがもりきりふもをる拾の下家
沙弥初白八ふ拾の下者のさびくさと孫ふふあくこ

同じくふかく一ツの板をうゑ人ぶるとも

河辺

ゆくすゑのやゝ川きの波のうもれてはくづすゝ人のおぞの秋雪

そゝぐたしゝ白袖めぐらしし　二三の白ハ秋をくづせバ

ゆくみあくる波の高花こそをらふ　人の袖の秋雪ハ

紅葉つゝ毋の雪ハ川きの高花たゞ〳〵ふきこゝ人の

神のこゝろふかくるゝよりてこゝやつふよこゝもせるこゝ秋しバ

ゆくハ神のたゞ〳〵ふこゝるこゝ袖をバ白ハ白の水

づゝこゝ人の秋のこゝ水をゝ思せこゝるあゝり

秋こゝを式部ハ神ハ雪ハふくきこゝあゝるこゝ人こゝ秋ゝ

行せこゝふこゝをこゝまし　一こゝの高ハ波の高こゝるこゝ秋　又

雪ハ人の神のこゝ秋のこゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋

こゝまゝ秋こゝ白こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋

こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋

歌　しらべ

俊成つ女

吹ゆくこゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋

吹ゆくこゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋

詩ハ今せし雪ハ秋ハ山ハ秋

家隆卿

秋風の神ハ吹こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋

上白ハ雪こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋

三の白こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋こゝ秋

し。　下句ハ花もつぐべきふる年をしらるべしとぞ。

[illegible]

[illegible]　宮内卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歌しらべ

俊成女

あづまちる露の花かつらしたもみぢそうづまくずもとゝ露の山風

露のみつゝ花のよもぎ月

みるとなき露に月今宵

そゝつ人もあはしぬゝ秋ぞまたあるふうづひやどのまき露の

やんごとなし。そゝつ人もあるまじく秋のまき露の

ふるさとひぬまぶやどの道もまゝふようづとて。そゝつ人もとし

かすゆ。みる秋の月。露も吹ゝひく。道ぞまゝふうづ

もれたまぶ人ぞひとる人もあるまじ。秋ぞ

くとしるぶ人もこじとゝまり。さて露

もおくゝもすじとゝまゝふいひうゝ。吹いひうゝ。

ぶるしゝうれりあるべしとゝまるふいひうゝ。ぶるを迎き

世の人ぶゝまゝ人ぶゝしく。露をおくゝもゝふいひうゝは。

むぐゝとゝかすゆ。帰ふ月ぶゝ露ふ秋ぞふゝ

ゝのゝる露をぶ神ふあゝ。ひうゝれゝ。ぶゝの秋ぞ

み神のゝうゝとふゝ。ぶゝのみの月をぶ人ゝ

あゝ神ふあゝし。ゝ。花ぶみゝ。ぶゝかをゝゝゝ。色か

ゝゝ露ふぶゝの月ゝうゝ神ゝ露ゝ。神ふあゝゝ

とゝゝ倒のあの波ゝ。秋のゝ波ゝ。

月の波ゝゝ。ぶゝの月のうゝぶゝし。あゝゝ

乃露の玉ふ海づら風ふいかさて上ふ露をばとゝるをぱふ
今やとく八おまもゝ〳〵ゝらぐさをまもひとゝるハのしいなぐ。
秋の夜の月を弁ふ　　大江天台佐割
秋ふかぬまもやまもの木ものきうゝ〳〵ゝ紅葉し者也中の月
ゆ中ものやまを紅葉ゝ者也ゝ秋ハ者ゝ
ゝゝ中ものゝ月ゝ秋ハ者ゝ
ゝゝ中ものゝ月ゝ秋ハ者ゝ
ゝゝ中ものゝ月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋ごとにたづねし上野初めぞこしの山の名ぶ秋
ものうらうらとなる秋の名ぶ　波の名ぶ
なるかぶの名ぶのなごりかれぬ花のはかなしの
ゆくらんこと未こひやもそるる　寄合恋ぶ嵐や旨ぶこ
ふお恋きびゆくらんとあるふうで
おそ年ぶりし何秋のうく　式子内親王
相の名ぶふこぶかぶくもりぶかれぶ人を待ぶれど
秋ごとにたづねし　秋やどぶそもあるやどあれ名ぶつれぶ
き人なまつとせしまぶ　恋しるぶやうぶつれ
なるき人を待つ宮出なのねぶもく　初秋ぶ一首ぶあら

そもくる相の名ぶのふうをがくもまぶしらとつるぶ秋の
いくくふぶくるまし　ぶ

みるに毒寄合ぶ　家隆卿

露しぶもるぶ山陰の下ぶぬるくるをくん秋のくるぶ
秋ごとにたづねし　初恋ぶ　なぶ、ぶ露ぶれも
いくくもるぶくく、　ぶの白ぬれつぶ恋ひくおくる
ぶくのくるべし　ぶそくのくるぶ秋ぶ用ひて秋の
うくみぶくぶくぶくくべし

歌しらず　西行

おぶくぶまくぶの名ぶ秋を風ぶくくん

風をまつ小笹あるまをいみ　ちきあふすまぶ八重の霜
ぶりたるをいふとつる八重・弁ふかうみづ又ぎさきみづ
らのもくつるとりこへど嵐のこぎ〜きふ雲ぬ〜んなふ
るふどそしはある物ぞといふことを風まそぐんとまるく
とつるふいそ〜きひごろまり・さることもあることもし。

あの百そこの宮合ふ　拾遺

高砂いまこの頃の秋風ふまぐれをいまぐ人の神ぶ
ぞぐ山ぶし。　高砂八重の色へうきり。　今こそ
て紅葉秋とそる秋をいふ。　風ふ〜ぐれのまきり。
まぐれまいそぐと世の人の秋のふをしいそなな

くまぐるのおつるをもち高砂の まぐれをふ〜せて〜ぶ世をを
ぶるごとくおくの神ふも四をふ〜せて〜そんじこそる
ふしおいひふせるまり。いそぐとそ。車まいとまむをい
ひて〜。高砂の〜げ色をいそぐとうまぐれをふ〜せて
ぶるとをいとまむふ〜。　ひそ〜ぶ〜きそ〜ふ〜て。
よくそ〜ふ〜。

五十首　ふ〜ませ侍るふ　宇光法秋主

名ゆ〜ふ〜いぶ〜ば秋を惜ふんじさ〜でもまろ〜あの金を
二の白さぶ〜ぶ〜ばふり。　下白秋ふか〜ぶ〜とそ〜ふ
き金下ふる物をとの一ふる秋り。

冬の部

[illegible]

俊恵

あさぼらけ[illegible]

九月尽の秋をしたしみおもふあ[illegible]

神の浪の雪ふりぬるかやのまつるあやうし

春日社会合ふ[illegible]

慈円大僧正

[illegible]

[illegible]

通具

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとをぞたし。紅めでぐ。　蓄堂ふをん殿ぜぜ。嵐ふふ
うれて。うつりゆくをもふそ。その嵐れ多のするぶまきのうぐ
られちるとと。下白笠ひあり。ぶのいろまきと。不見ゆ。

七條院大納云

神ぞぐれ嵐ぐの山ちまもぐ。嵐を嵐ぐ。と深ずやそうん
神ぐ毎の神も。ぞのぐ。下ふうけ合ぐ。もし。神ぐ毎。
そじぞ。ぐ。りとらつ。ぞ。嵐ふ。ぞじと。ぞ。ぐ。
ぞふい。る。ぞ。あ。ん。三の白れぞゆじ。ぶ。ぞ。ん。ゆ。ぐ。
陸白。あ。ん。とある。ぞ。ハ。ぞ。ろ。し。　京ぞ。ゆ。ぞ。ん。ぞ。ぞ。

祝部成茂

みぞの。ぞ。ぞ。ぶ。ぞ。ぞ。ぞ

かくみしき秋のうつろひやちぬふるあめぬぎ小雨こそあめ
おほ雪のかくみしきなかふしむらあれるハ秋のうつろひをたづぬ
やまのうち　かく海ハたつれ孤人　ちりあぬとぶ雪を
ハなぶぐるあやまでみもいてこぬをうつ　一首のをハぶまぐちる
をみもいてこぬをあぬをのなかふ雨のふくハ秋のうつろひを孤さじと
てうつろひをみたつやうをうきをうへきつぶをめしいしる野ぬ

歌　　西行

月をまつる板のをそをれみてんあるぐさ初しぐれうれ
ぬの白くもるをいてべきをよ上のくもりをれるれふあらぐべ
きをいてるもるべしなぐべきをうをうをう

枝もいろ〳〵むとまりり。

[illegible]

二條院讃岐

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

へうけてハんべうこん。　ナ白ハ時白ハふしぶしこそのおれる月こ
いつそも　おそし　あるをふこおくるなどゝ　村さのおりて　更ふさうる月こ。

歌しらず

それとゆる　紅をこそやふさ紅　たゝぐるうぐるゝ　山のその月
たゝぐるうぐるゝ　ふもふもう上旨のさ白をいふ。　みやこと　山
湯とゝ　ゆ　ゆ

冬十首　ふもりしの　　寄月

たゝぐ〳〵ふ雪　ふ月のひかりかな　れをあくるよりの村さて
ゆんぐ〳〵し　上白　紅ゆんぐ　たゝし。

歌しらず

惠慶大僧正

もみぢ　ふ　ふ　ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みてしぶ　太上天皇御製

みるめ　の　ぬれぎぬ　を　あくる　袖　ぬ　ぬれぬ　時　なし　ふる　ものの　あはれ　しる

波　なれ　ぬ　ぬ　ぬ

免ぜたし。「人あり」人みな世をやそとのあるまそこ
美濃やきやうさかり。　こゝろみ抄ふ二の句をよの中は
車ハ行のうへを美ぞ　ちりとしるふ　ふもとに花かしを
そとやうぶもとしてしべきそをや。
きさぐしきふるめへる人の又もあれふ　をもをべんをの山を
或抄ふ二の句を　花ふんるるこゝろぬ人あ　或
うしとへるもりとしるかゝごゝろなり。

俊成

かつこゝりの川ハ　ゝ風山川の　ゝ見ふむを　ゝ行うまの　ゝ足
山川の　ゝのあるとつゞ　ゝこゝ山川の　ゝ見ると　ゝ行ごゝ　ゝ来あゝ　ゝ見。

清人

清人の見るもの　ゝ来れあるの　ゝ恋しく　ゝ行れる　ゝ藤ごゝ　ゝ見り　ゝ
ゝべて清　ゝ行ゝ　ゝこゝの　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来
ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見
ゝへゝ　ゝれゝ。　又ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見
又ゝの　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来
ゝとあれ　ゝ来ゝ　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見
川ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見
ゝゝ。

撰改

花みも独みもゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見ゝ　ゝ行ゝ　ゝ見ゝ　ゝ来ゝ　ゝ見
ゝゝ。

○天徳八年内裏歌合　二の句

四十四

下白色でたし。河もめでたし。　震塵氷を落さるる
むかしがたり平家にふおもしろかりしかばこれをかくとかいつけ
ふるくハんなり　世の物あとをはかなくとゝめるもはかなしかし。

冬十月氣なりしかば

名所をたづねこゝろざすとて清川ふねにのる者ども波
初白やもゝじはるかに　ひのやまぶこの白雪切るべし　雪ふるまりあるこゝろ
紅葉のそだちの下水流れもきそもとゞまるべくてなし
たゞぶるゝ人のこゝろにもんぢぶそなたもあるとも
紙ばたゞくこゝろもきるふるとあるのとふとあれ川ゆき

ものべくあるとあきたるあきさぶ波とうねのごとくたゞべくちと
べられぶるまりあるこゝろもあるべきまゝにぶかし
又花白やまぶをすべくそこのこゝろにてこれ清川みと
あるぶもゝじあるやまぶるをや。

あるこゝろ　なりしかば

こゝろしきの秋のこゝろもんぢぶそねぬよの夜でうじ
二の白もゝじ波ぶそ行ぬこゝ　ふあ　ふれり。　夏ぶでみ
じゝきこゝろ　ふ波ハやこゝあり。　鶴鳥きぶ波
初ぬねぶあさびゝきこゝのよもんぢぶれる夜のうぢさ。

元稿は天王洲の陸てふ字清川ゆきたるか

さし姫のかつてしきれさしろふまつ秋むまみしきやうの海のなぎ

右上天皇御製

あじろぎ小山さしてひとりやねぬるうもれ橋

慈鎮大僧正

みちのくにて

百首歌たてまつる

式子内親王

さくらすゝふみゝ遠ふかり路のみる人なきくらすごゝろ

摂政太政大臣

春の浦やまぎうりゆく波のうへこゆるうきぬ月

摂政太政大臣

さよふかるまふこぞたやこゝろんゝ

小つゝそ

ざうり紛波のうり月もうゆりていつるも

宇治法親王家百首歌

俊成卿

ひとりさる池のこゝろふすむ月のやどゝ神もうつりぬるかな

秋ふかつるとゝ新のさすとゝ池より神へうつるをかねて

いつゝひとりさる気ふあもれなもよおしして後のかるはし

まゝ

さそし北宮おとゝ

くまべくゝのさゝなくこゝろ

秋の月まるゝ

摂政

年そこゝろしし時

月ぞすむ月ゝふきの雲吹上のちぎりもうゝ

秋のぞもじかるゝ

三の月まてゝ

で、能の詞ゑれば、ものきの山やらのこゑ、ことこゝに。
みる人、数をつくせども、ひとりとしてみる人、なつかしれば。

最後四天王天像をふる海浦をまつる所

秀能

風ふけば、そのそふまつこゑのうらにあらひあらはれぬ波ふかなくくすそのの邪
二の白風ふぬれば、よそのうへの美人。
よそふうつれることをのうらに。　三の白、深よりひらけ
たるなり。　四の白、風ふかれくやくぬ波のうへ
なることがあらひあらし。人のそをやうをぬをかなうら。
おもしろ後　通光つ

浦人の日もゆゝしきまつ、かへらぬ神ちりあるまつ、ぬ
一三のつゝきは、初白波の白れ上あるこゝ。　下白
おのしかくば。

文治六年女御入内屏風ふ　秀能つ

風ふきあるこゝ、海ぶ松のむらちりぬ波の心ちりなり
ちれり花ふこゝ。　下白おろしこうば。

建久十年二月皇后宮歌合ふ　雅経

はるあるこゝ、やまそもいく春ふ春きるこゝ、のひとりね
名ぐたし。　三位の白、春の川、ふ春くるこゝ
ちりぬ人をあもこゝ。此下白のこゝ、の

宮内省圖書寮

えらりぬふ思ひぬ人をよそ[illegible]をば[illegible]しとそ[illegible]ん。　二の句ハ
ものごとく思ひぬ人を思ふ事なるをきあ
[illegible]ていとゝ物おもひまさるべし。

式部卿宮

[illegible]

[illegible]の書[illegible]

下句ハ[illegible]

神句[illegible]べし。　下句ハ[illegible]

[illegible]

入道前宮白太大臣ふ[illegible]時[illegible]の[illegible]合ふ言

[illegible]

[illegible]

神句[illegible]

[illegible]

[illegible]

今ぞきくこころの法はかりなりとあてに思ひやるべし

永ながれゆくこの色のそこよせもふこひやまざるべしそこの

あぶくの法のつきくんとおもふべし今

こそうきをはなりつきさてこんの法をつゐあはせ作り

きくこそかなり。

玉そこ雲はしり時　定家卿

約束のそこ神おそらく法をあしきのうたをの名をる

いとゆゑぶかしし。　万葉ふるこそりとる海きを

ゐ法をのあらふかあしあくふどりをそうくその

くるしこそふりとるとゆるとゆるとゆるとゆる神

うちつくふのきよしとをもたるこれ八法をよく言

しやうくそうくなるとあをしてやくこうべきかれ

ちきこそ河のあふあるし。　近くは万葉風をつゐ和歌

らうやとむ業代法の弟をびくいひあしまむし

くばの代とあるくあるとあれどこうくあれ志

ひとあり神うくこそうふ法をしとゆるふるしきんも

あのちきこんもあくまでこそつりていとくゆるあをや

指波大明神ふ仏をよりを世仏をる山家さる

まつ人のふもとのそこを見ぬるん新潟の板ふをあるをすり

ゆんぐたし。　新潟をる板ふをのかりつかりて波

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日数こゝのかをかゝるまでの間、ゞの物語りもしたゝめの事
初二日八幡の日数へこゝふきばかりをこゝ
くやく有ふいふ。一そハ烟のこゝぐきづのみぎはし
きこゝふすこゝをこゝ紙ハまこゝるこゝいみこゝびこゝきこゝ歌こゝ。
年のこゝるふこゝかつこゝしけれ　西行
あのづこゝいこゝぬをこゝこゝこゝ人やあるこゝこゝ花ふ年のこゝれぬる
おのづこゝハこゝこゝこゝ

なり。　ふるさと梅ふ昔をてひてふあべ。そひ出てる
だーうりへ。ぎしへるふくふかたび。さてしうきとおとしるなれすでや。
まべくよみるふをこるうへの境界ふかるへこうんをする
かこうふ仏をひでとへいてみんありちんうふんまふあう
ざれびをうふふきそしいをどう考まこるてもなうざん。
乳ハあもみんをいつこそしたびたぐあるまふよみ生れバてめこん
でたきあふハの孔うこべをつこうひこぎりてんるぎよく
こんするふう仏さきかこふごろこうし。

摂政

いこそのかこふる郭のをぎて。年をへて一よどりふあるる年ふ

おこをへてこをを笹の孫ふ年をへくとふるんしよりさこの
孫へさそしいそのつこふるれとへ家の孫のふるのつあをこう
いるるみここう又年のふるくちれるこもあるうこへのへきこれば。
いのなれぶもじ。よびりふあるとそしいべれあるとてハんで。

前大僧正

年のあもゆてうきこの長れさひべくハこるるとるとふぶこうほし
こうこ年の明こをびこしもこ知ちるるあふ年の明てとこりめを
きど年ふ明としいこそ。俗ちこうし。　又ふこをこるふか
ちべ。さべくしいここふ和ちそも年こもあるをふここて。
ふこをこをこうこをてしいへ年のこれゆくをふこよハしひぐく

一年まくばまるをいとはるべしとれよくへのあや
こるるすなり人は有べし　ひとりねのなげきはし
るべきを法師まふるあしばかりのものをうらむ
るとるもるもはかなきはじとふるあるなふたしかへ
られたるまやまし秋しまぎるまし社あるべれ
ふるそこのなりし時　八月十九日
いそが死ぬ年のそるそてあそれもうしなそふやうしまちうハ
まべく年をるのをふいそぐともむが年の始のまを
をいとふむとくまを本まやくまようしとまつとくんなる
八法なり　ひとの八をのはもるるなふまの始のまう

き年をいとふまべきうぐこもまをしなり
七月門内大佐家みく海色集を
九月年を経しものあまのぬをれるまれて秋ふ波やうくらんへ
こ秋八波人の果をるのさ身をびやりたるをん　かまを
く花の孫みく花ふ波ふめれるうへふ年をしむを
又波をやうをまくしんを　武およ作者の方れへの
をふ沈せるぬやといひらんとへまるめぐり
寿蓮
花の波をくるる方てをあそれてをしをを八来の海川山

9112
2
06

三の白今年も今ふたゝびふる年合ぶ又こゝんぶであハ
ゝ白ちるおだてどいとも主のほしき或ハ又ゝうぬやこゝ
ぬべきおだてどふたゝびもちゝめ

多丈ふ主義一昇一合ふ　俊宗

ゝゝでとふきゝゝゝゝゝゝゝゝとおもへどる又ゝとしふるもふけるも
きゝゝゝゝゝゝゝゝ